

— エレミア 23 章・1-6、エフェソ 2 章 13-18、マルコによる福音 6 章 30-34 —

〔そのとき、〕使徒たちはイエスのところに集まって来て、自分たちが行ったことや教えたことを残らず報告した。イエスは、「さあ、あなたがただけで人里離れた所へ行行って、しばらく休むがよい」と言われた。出入りする人が多くて、食事をする暇もなかったからである。そこで、一同は舟に乗って、自分たちだけで人里離れた所へ行行った。ところが、多くの人々は彼らが出かけて行くのを見て、それと気づき、すべての町からそこへ一斉に駆けつけ、彼らより先に着いた。イエスは舟から上がり、大勢の群衆を見て、飼い主のいない羊のような有様を深く憐れみ、いろいろと教え始められた。 -マルコによる福音 6 章-

裏切らない真の牧者

” イエスは飼い主のいない羊のような（民の）有様を深く憐れまれた “

かつて、神に祝福されて選民となったアブラハムの子孫たちが、その後一千年余りの歴史の中で、国を滅ぼして捕囚を体験し、ここまで悲惨な野放し状態に落ちたのは、ほかの誰のせいでもない、実は、民自らが選んだ生き方の結果でした！

彼らが自ら選んだ生き方とは、アブラハム以降、神を牧者として守られてきた子孫たちでしたが、約束の地カナンを得る段になって、強力な先住民の武力にひるみ、自分たちを指揮して先頭に立ってくれる王を求めたことでした。それは、王の奴隷化も承知のうえで、神から許しをもぎ取った、彼らの「かたくなさ」にありました。それにもかかわらず、イエスは民の今の現実をかわいそうに思われる神なのです。

王とは、本来、民を養うために導く牧者であるべきなのに、ダビデ王以後、晩年のソロモン王の、神への背信から、二つに分裂した王国の、それぞれ歴代の王たちはことごとく、他の神々に心奪われ、唯一の神の恵みから離れて国が亡ぶに任せ、民は全く 飼い主を無くした羊と化したのです。

飼い主のいない羊の哀れさとは、信じた者に裏切られっぱなしの惨めさなのでしょう。

ところで、力あるイエスを信じて人生を賭けた弟子たちも、権力の前に、あっけなく死んで逝った師に、裏切られたと落ち込んだことでしょう。しかし、神が私たちに裏切ることは決してありません。復活して戻ってこられた主は、挫折や絶望からの「苦しみを超える道」を私たちに示して「救い」へと導いてくださる真の牧者なのです。羊のために命をも投げ出してくださる牧者です。

このイエスに派遣される弟子たち、ひいては私たちキリスト者は、行く先々で、飼い主のいない羊たちに、「あなたに合うとホッとさせる。また会いたい」と言わせて、「苦しみを超えて癒される道」を伝える宣教者にされるのです。

